

新編
國語讀本

尋常小學校
兒童用
卷五

福岡縣師範學校
圖書

國語部

架	番 号	冊 數
	一	八
號		

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 0 4 7 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ko97j

小山左文二
武島又次郎合著

新編

國語讀本

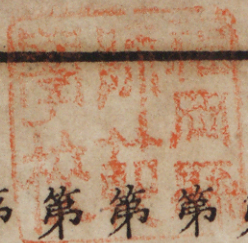
尋常小學校
兒童用

東京

株式會社普及舎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用 卷五目次

第一	日の九のはた	一
第二	大日本帝國	三
第三	いせまゐり	五
第四	春の野あそびのうた	八
第五	ヨ一サン	十一
第六	太郎の手紙	十四
第七	日々ノツトメ	十八
第八	かんしんな子ども	二十
第九	ツカハラボクデン	二十四
第十	モノサシ・マス・ハカリ	二十九
第十一	しほとさと一	三十一
第十二	臺灣と北海道	三十三



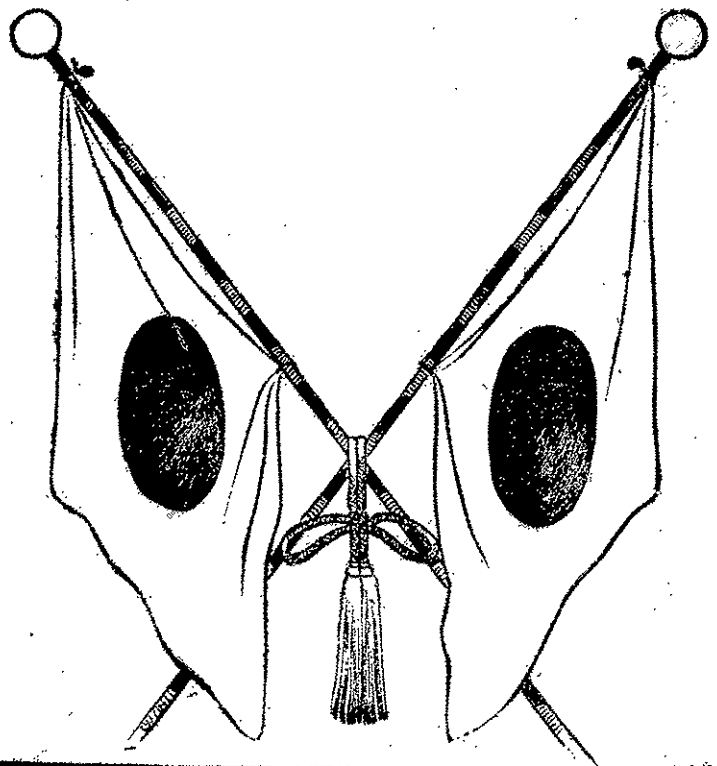
第十三	うをつり	三十八
第十四	川のうた	四十
第十五	クルメガスリ	四十三
第十六	才絲の手紙	四十六
第十七	こぶとりのはなし	五十
第十八	こぶとりのはなし	五十三
第十九	獸ノ王	五十六
第二十	空氣	五十九
第二十一	夕立	六十一
第二十二	山ビユ	六十七
第二十三	ヤマトタケルノミコト	七十
第二十四	げんぶ門のつとり	七十四
第二十五	日本男子	七十七

新編 國語讀本 尋常小學 校兒童用 卷五

第一 日の丸のはた

日の丸のはたは、わがくにのこつきであります。

國 旗
わが國は、昔から、日の本の國とも、又、日の出づる國ともいつてをりますから、朝日のかたちをうつして、旗じるしとしたのであります。



外の國々にも、
みなそれぞれ
國旗はあります
がわが國の國旗
のよーに、うつく
しくて、いさまし
いのはありませ
ん。

光

我等はこの日の丸の旗の光りを世界に
かがやかしたいものがあります。

第二 大日本帝國

帝

コレカラ、ワガ大日本帝國ノ形ニツイテ、
オハナシヲイタシマセウ。

マツ、ゴノチヅヲゴランナサイ。ワガ國ハ
四方が海ニトリマカレテ牟ルシマグニゴテ
アリマス。

數

シマノ數ハ、タクサンアリマスガ、中デ、大
キナノハ、五ツデアリマス。

島

トカゲノ形ヲシテキル一バン大キナ島
ヲ、ホツシヤ本州トイヒマス。

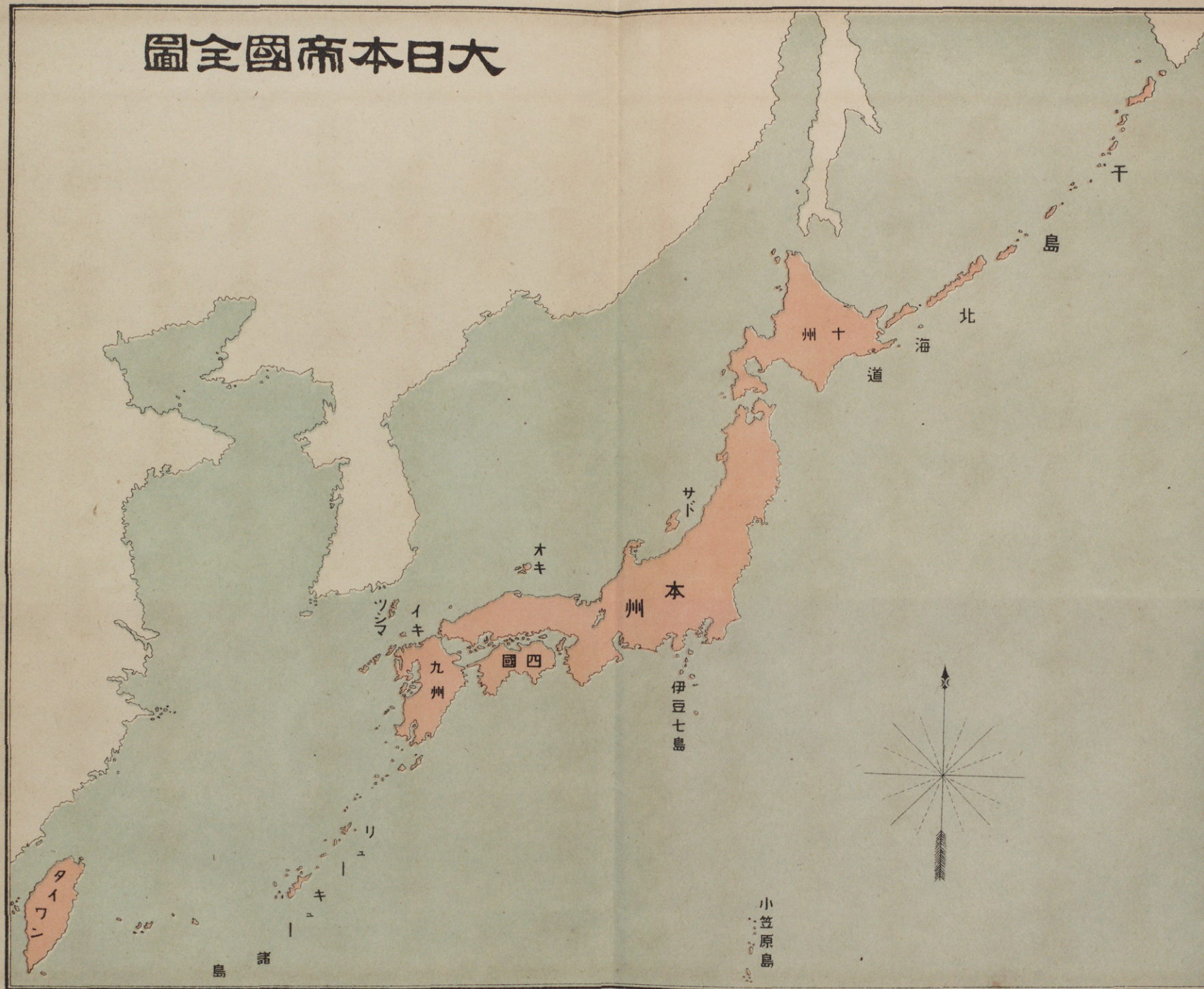
近

トカゲノ口ニ近イトコロニ、赤エヒニニ
タ島ガアリマス。コレハ十州デアリマス。

トカゲノヲノ方ニ、サルガヲドツテ居ル

ヨ一ナ島ガアリマス。コレガ九州デ、ソノソ

大日本帝國全國圖



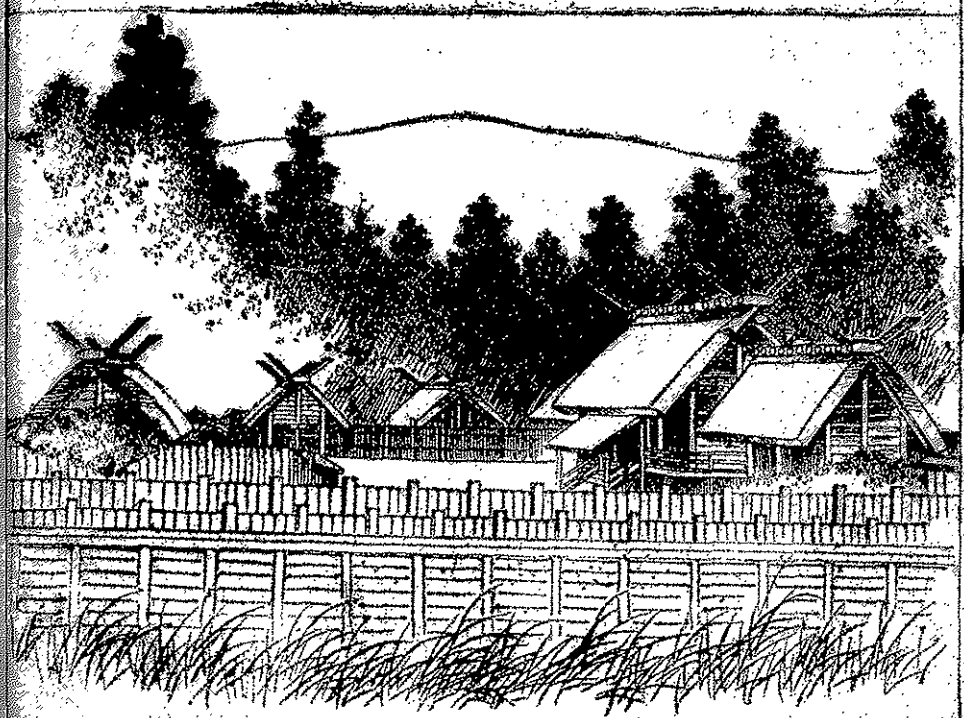
・
バニアルカウモリノヨーナ島が四國デア
リマス。

マタ、九州カラハルカハナレテキル一ツ
ノ大キナ島ヲ、タイワントイヒマス。

第三 いせまゐり

多
いせまゐりといつて、年々、多くの人
出かけますが、あれはどこつおまゐりする
のでありますか。

神



あれはいせの大
神宮様へおまゐり
するのであります。
いせの大神宮様
は、天照大神をお
まつり申してある
お宮でございます。
天照大神は、

祖

天皇へいかの御先祖であらせられました。
まことに、たふとい神様でございます。

頭

おまゐりすると、ありがたくておぼえず、頭
がさがる。と申します。

レシシユ一第一

ワガ國ノ天子様ノ御先祖ハ、天照大神ト申シ上ゲ
マス。天照大神カラ、今ノ天皇ヘイカマテ、オチスチガ
ツツイテ、一トモ、タエタコトハゴザイマセン。

野 氣

イセノ大神宮様ハ、天照大神ヲオマツリ申シテ
アルオ宮デゴザイマス。大神宮様へオマヰリシマス
ト、オホエズ、頭ガサガリマス。

ワガ國ハ、米ヤムギノヨク出來ル國デアリマス。

ワガ國ハ、ヨイミナトノ多クアル島國デアリマス。

ワガ國ハ、コレマデ、外ノ國トイクサヲシテモ、マケタ
コトノナイ國デアリマス。

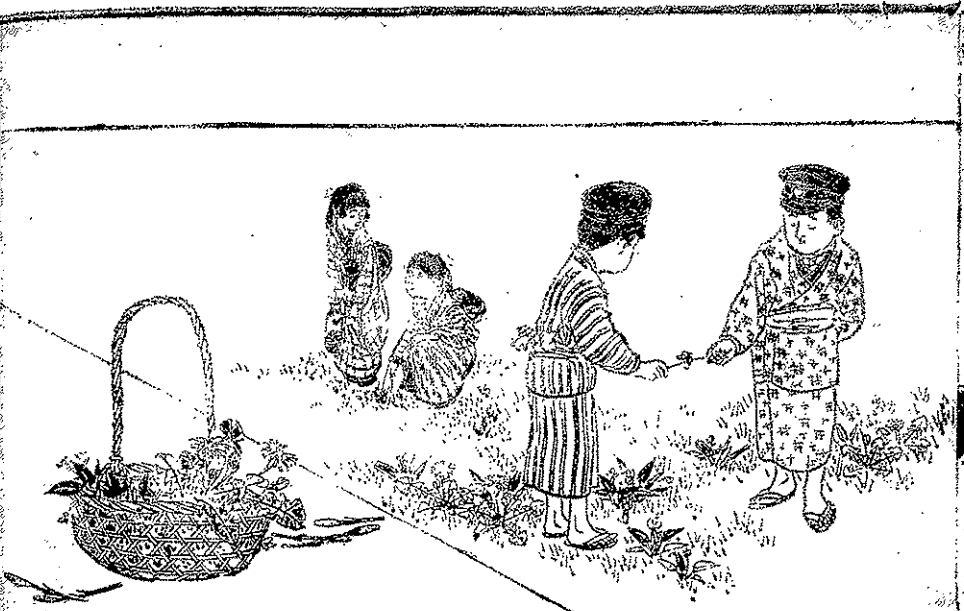
ワガ國ノヨーナヨイ國ハ、世界中、ドコニモアリマセン。

第四 春の野あそびのうた

けふは天氣もうらうらと



やなぎのえだにも風はない。
子どもは朝から野に出でて、
むれつつあそぶ春びより。
ひよりよろこぶあげひばり、
こゑはおとらぬ男の子。
朝日にわらふ花ざくら、
ゑがほはおなじ女の子。
白いちよーちよやきいなちよー。



青い草葉や、赤い花。
 赤いは何ぞれんげそし、
 青いは何ぞもちぐさよめな。
 中をいろどるたんぼほすみれ。
 すみれとるのはなせおもしろい。
 かつたまけたの花すまう。
 よめなつむのはなせたのし、が。
 はんにもつのみやげもの。

第五 ヨーサン

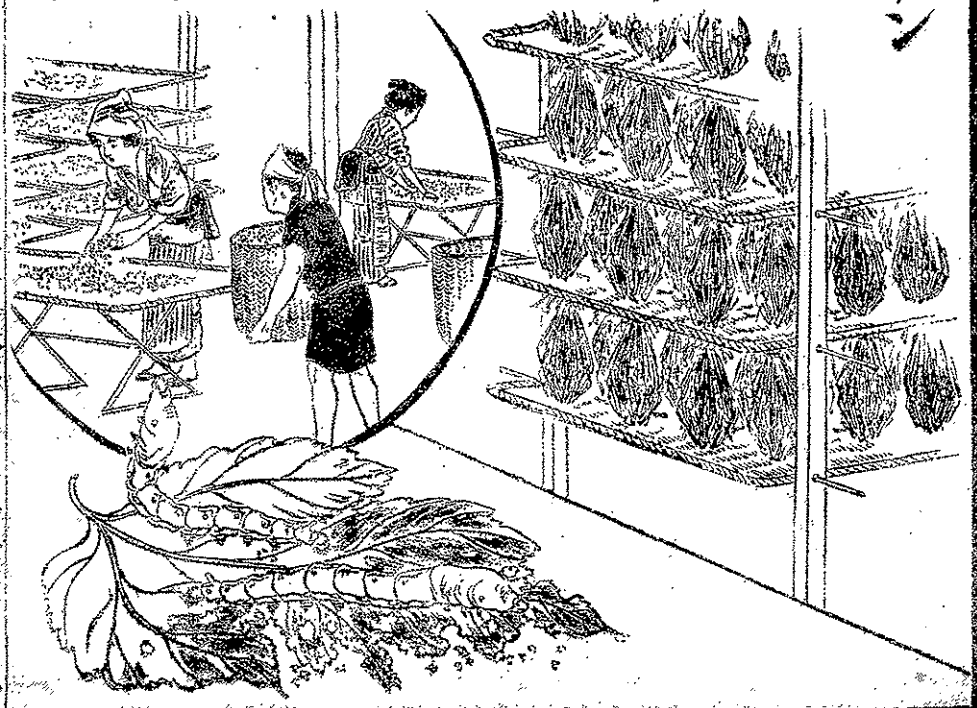
蠶

コノエハ蠶ヲカ
 ツテ居ルトコロデ
 アル。

蠶ハタマゴカラ

桑

カヘツタトキハ小
 サイアリノヨーデ
 アルガ、桑ヲヤツテ



ソダテルト、ダンダン、色ガカハツテクル。
 蠶ハ、十ブン大キクナルト、アメ色ニナツ
 テ、ロカラ、絲ヲ出シテ、マユヲツクル。
 蠶ガ、絲ヲ出スマデニ、ヨホドオモシロイ
 コトガアル。ソレハ、蠶カネムルコトデアアル。
 蠶ガネムル時ニハ、頭ヲアゲタママ、桑モ
 食ハズ、マル一日ノ間、ジツトシテ居ル。
 ネムリガサメルト、カラダノカハガヌゲ

食

カハル。カヨ一ナコトガ、四ヘンアル。
 マユヲツクツテカラ、シバラクオクト、中
 デ、チヨ一ニニ夕虫ニナツテ、マユヲ食ヒヤ
 ブツテ出ル。ソレユエ、早く、中ノ虫ヲムシコ
 ロサナイト、マユガ、イタンデシマフ。
 蠶ヲ養フコトヲヨ一サントイフ。養蠶ハ、
 大ソ一、マウケノ多イシゴトデアアル。又大ソ
 一、タノシイシゴトデアアル。

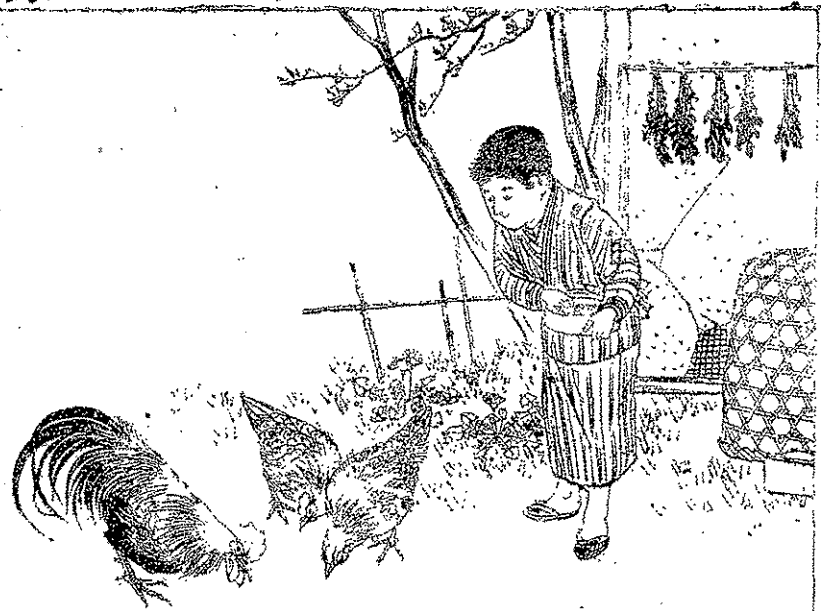
虫

養

第六 太郎の手紙

羽 太郎はある日、三羽
の雞を、父に買つても
らひました。

毎 太郎は、毎朝、こけこ
つこーのこゑを聞く
と、すぐに、ねどころか
らとびおきて、雞にゑ



をやりました。

箱 まもなく、雞がたまごを生み始めました。
太郎は、大をーよるこんで、大切に、箱の中に
入れておきました。

二三日ののち、太郎は、そのたまご五つを、
小さい箱に入れて、つぎの手紙をとつて、を
ちにおくりました。

卵 これは、私がかつてゐる雞の卵で

少

あります。まことに少しではあり
ますが、さしあげます。どうかおあ
がり下さいませ。

五月二十五日

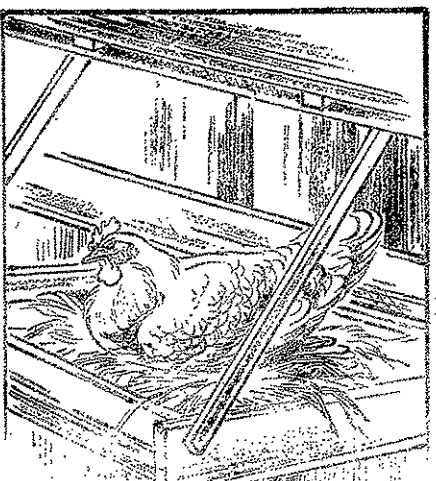
太郎

をぢ様

をぢは、大にーよるこんで、そのへんじの
筆手紙に、筆二本をたへて、太郎の使にわたし
ました。

レンシユー 第二

一羽ノ雞ガ卵ヲアタタメテ居マス。
アノ卵ガカヘツタラ、オヤ鳥ハ、
ドンナニ喜ブデアリマセウカ。
ヒナハ、卵ノ中ニ居ル間ハ、キミ
ヲ食ツテ、カラダヲ養ヒマスガ、
カヘツテカラハ、小米ヤ青ナナドヲ食ヒマス。
ヒナハ、少シモ、オヤ鳥カラ、エヲモラヒマセン。
ジブンデ、勝手ニヒロツテ食ヒマス。



第七 日々ノツトメ

皆

コレカラ、皆サンガ、日々セネバナラヌコトヲ、ハナシマセウ。

マヅ毎朝、早クオキテカホヲアラヒ、父母

姉

兄、姉ナドニ、アイサツセネバナリマセン。

朝メシガスムト、ソノ日、學校ガクデイルドー

グヲトリソロヘ、父母ニアイサツシテ、ケイ

コノ時間ニオクレヌヨーニ、學校へ行カネ

バナリマセン。

學校デハ、先生ノヲ

シヘニシタガツテ、ヨ

ク、ベンキヨーセネバ

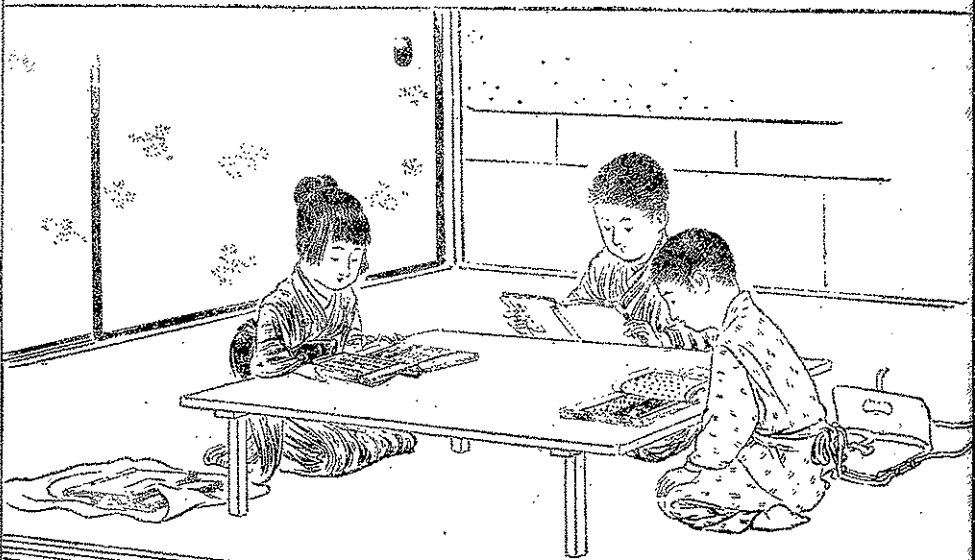
ナリマセン。休ミノ時

間ニハ、十分ウンドー

セネバナリマセン。

又、ケイコガスムト、

分休



新編 小学教科書 算術 第一巻 第三十回

歸

スグニ家ニ歸ツテマヅ、父母ニアイサツシ、ソレカラ、學校デ學シダトコロノオサラヘヤ、ウチノシゴトノ手ツダヒヲセネバナリマセン。

第八 かんしんな子ども

ある店で、一人の小ざーが入用であつた時、やとはれようと思つて、出て來た子供が、十人あまりもあつた。

供

この家の主人は、一つのたまを、てんじよーからつりさげ、一本のぼーを手にもつて、「このぼーで、あのたまをついたものは、やとつてやらう」といった。

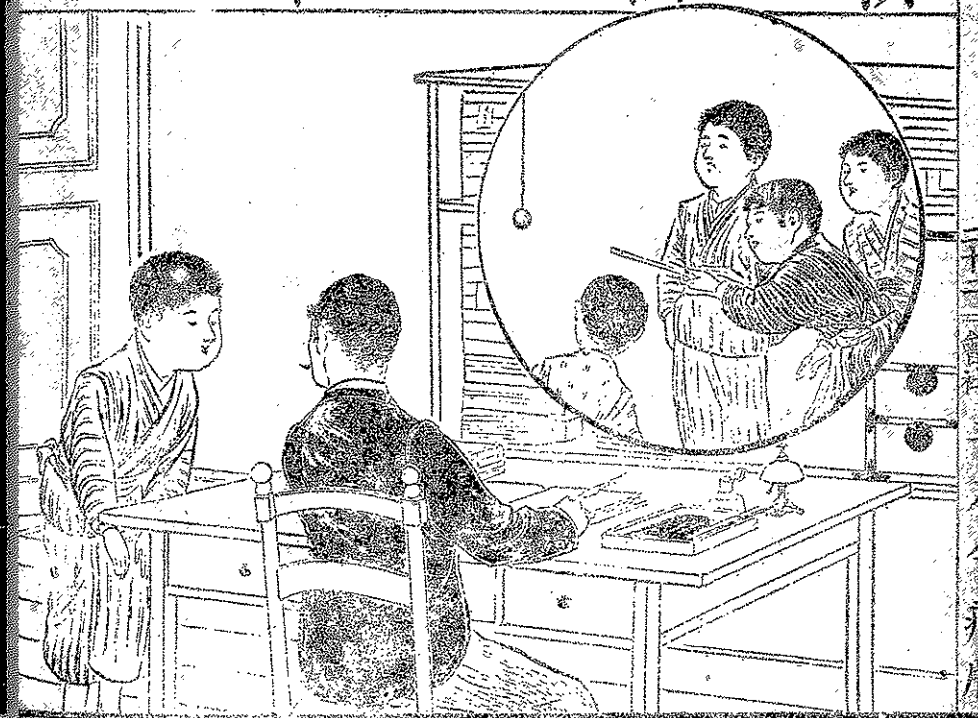
喜

子供等は、喜んでついては見たが、一人もつきあてたものがなかつたので、みなかへされてしまった。

あくる朝、又一人の子供が來た。よく見る

ときのお来た子供
であつた。

主人はその子供
を内に入れて、たま
を何ぶんもつかせ
て見た。ところが今
日は、一どもはづさ
なかつた。



主人は、おどろいて、「おまへは、どうして、そ
んなに、じよーずになつたのか」と、たづねた。
すると、その子供は、なみだぐんで、「私は、一
人の母を養はねばなりません。それゆゑ、や
とはれたい一心に、きのお歸つてから、今朝
まで、球をつくけいこをしました」と答へた。
主人は、この子供の心がけにかん心して、
その日から、すぐやとふことにした。

第九 ツカハラボクデン

昔ツカハラボクデンといふけん術の名人があつた。

ある時船にのつたところがそののりあひの中に一人のこーまんなさむらひがあつて、けん術のじまんばなしを始めた。

ボクデンは、をかしさをかこらへて、ねむつたふりをして居た。すると、さむらひは、えら

いいきごみで、ボクデンをゆすりおこして、

「おまへのけん術は何流だ」とたづねた。

ボクデンは、ますます、をかしく思つて、私のは無手勝流だ」と答へた。

さむらひは、大をいおこつて、なに、無手勝流だと、そんなら、無手で、しあひをしてみよ、といった。

向
ボクデンは、よしよし、向うに見える島で、



しあひをしよう。とい
つて、船をその島へこ
ぎつけさせた。

船が岸につくと、さ
むらひは、すぐに島に
をどりあがつて、刀を
ぬいて、「さあ来い」と待
ちかまへた。

ボクデンは、少しも、さわがず、こしの刀を
せんどーにあづけ、さをを取つて、つよく岸
をついた。すると、船は、島をはなれた。

その時、ボクデンは、大きなこゑで、わが無
手勝流はこれだ、くやしいなら、泳いで来い。
と、いつて、からからとわらつた。

のりあひの人々も、みな、手をたたいて、
どつとわらつた。

れんしゅー 第三

きのふからの大雨ははれて、まことによい天気になりました。今日は、にちよーで、學校も休みでありますから、多くの子供は、野はらに出で、あそんで居ます。向うには、男の子が、ぼーを持って、球なげをして居ます。こちらには、女の子が、手をひいて、しよーかをうたつて居ます。まゝ、皆、うれしきうなかほをして居ますこと。



第十 モノサシマス・ハカリ

長 品物ノ長サヲハカルニハ、モノサシガ、入
 尺 用デアアル。モノサシハ、一尺ヲ本トシテ、ソノ
 丈 十バイヲ一丈トイフ。又、一尺ヲ十二分ケタ
 寸 一ツヲ一寸トイヒ、一寸ヲ十二分ケタ一ツ
 ヲ一分トイフ。

タンモノノ長サヲハカルモノサシヲ、ク
 デラ尺トイフ。ソノ八寸ガ、ナミノモノサシ

ノ一尺ニアタル。

油

米シホ油ナドノカ

サヲハカルニハ、マス

ガ入用デアアル。

升

マスハ一升ヲ本ト

シテ、ソノ十バイヲ一

斗

斗トイヒ、一斗ノ十バ

イヲ一石トイフ。又、一

合

升ヲ十二分ケターツヲ一合トイフ。

重

品物ノ重サヲハカルニハ、ハカリガ入用

貫

デアアル。メカタハ貫ヲ本トシ、ソレヲ千二分

匁

ケターツヲ匁トイフ。

斤

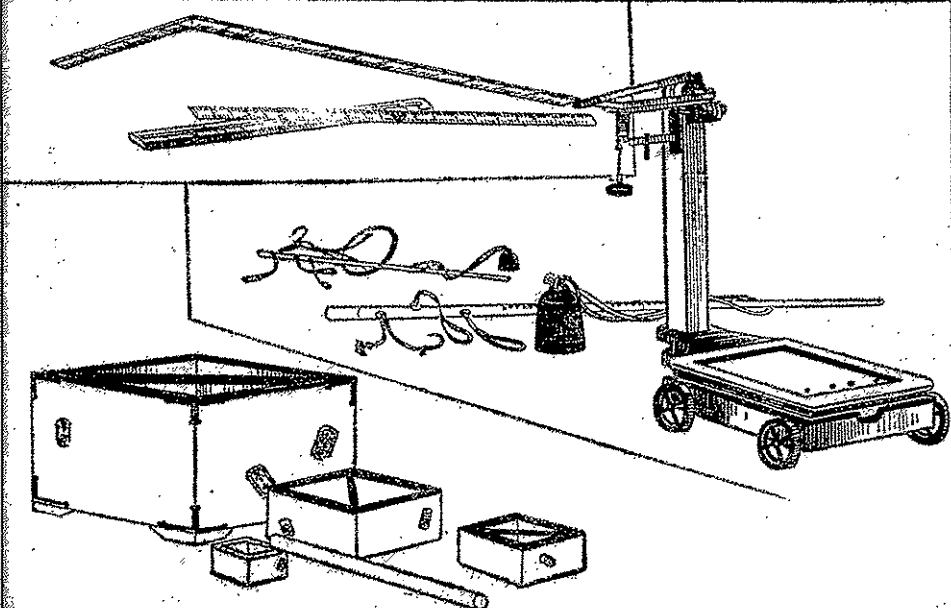
サトー、チャナドノヨ一ニ、斤ヲ本トシテ

ハカルモノモアル。一斤ハ、百六十匁デアアル。

第十一 しほとさとー

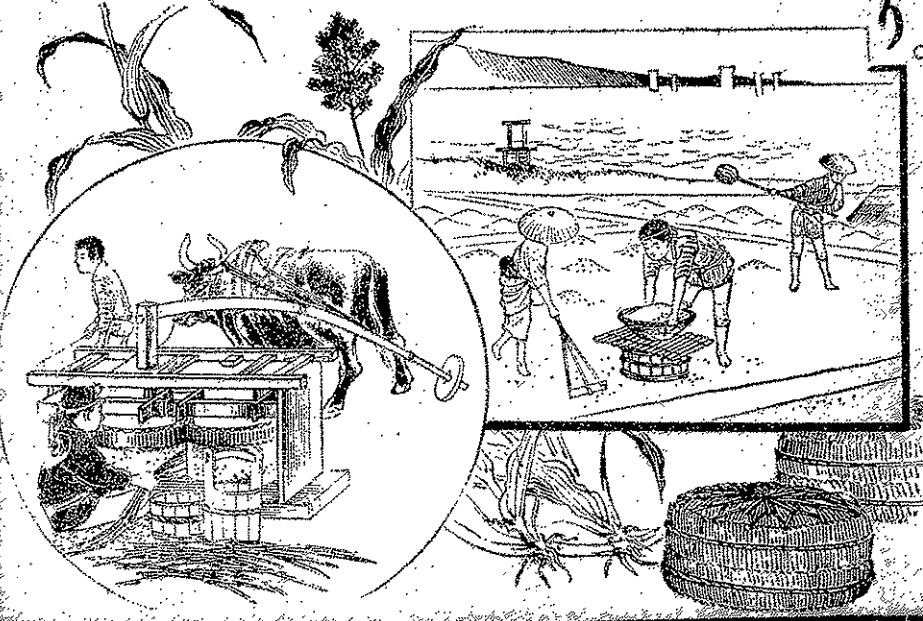
味

しほとさとーとは、食物の味をととのふ



製地

るに、大切なるものなり。
しほを製するには、
まづ海水をすな地に
そそぎて、日にさらし、
しほのかたまりの十
分砂につきたる時、砂
をあつめ、水をかけて
しほをとかし、その水



砂

をかまにてにつむるなり。

さとーを製するには、さとーきびのくき
をしほり、そのしるをにつむるなり。

糖産

さとーきびは、あたたかまところによく
そだつものゆゑ、砂糖は多く臺灣、四國、九州
に産す。

第十二 臺灣ト北海道

ワガ國テ、一バンアツイトコロハ臺灣テ、

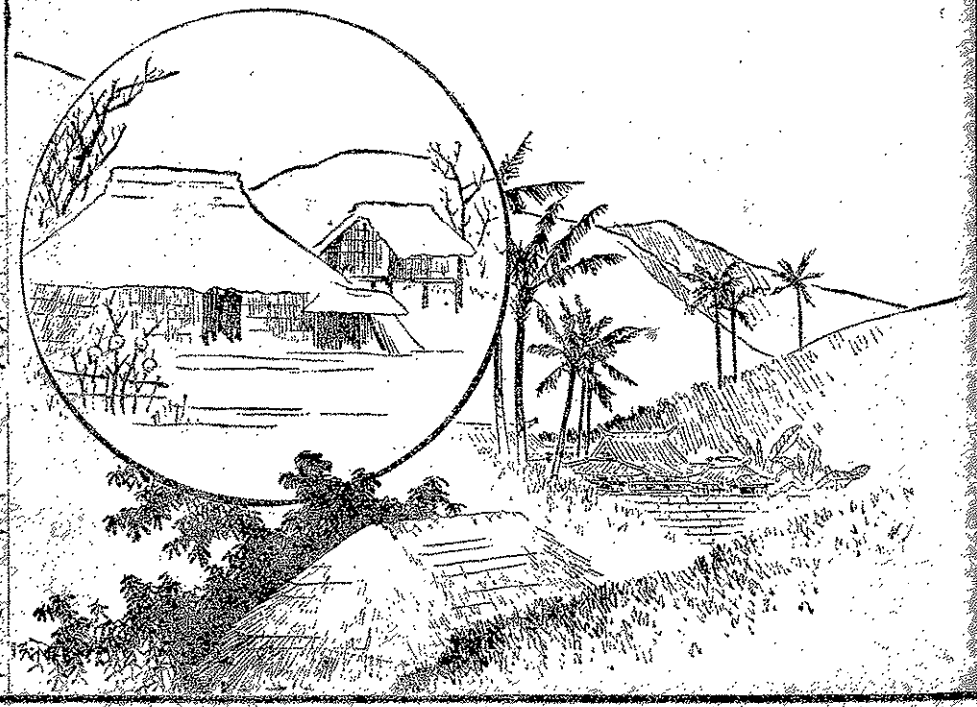
一バンサムイトコロハ北海道デア
北海道ハ一ツノ大キナ島ト多クノ小サ
イ島ヲ合セタ名デア。ソノ大キナ島ハ十
州ト名ツケル。又小サイ島ハ數ガ多イカラ
千島ト名ツケル。

作

北海道ハ地メンガコエテ居テ作物ガヨ
ク出來ル。又海ヤ川ノ產物モ多イ。

臺灣ハニツシンセンソーガスンダ時始

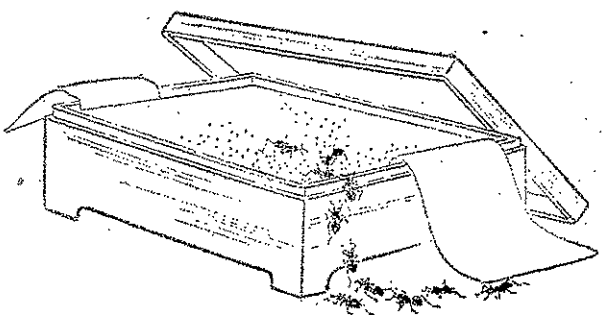
メテワガ國ノ領地
トナツタ島デア
コノ島ハ一年中
アツサガツヨクテ
草木ガヨクソダツ
米ヤサツマイモハ
一年ニ二三ドモト
レル。



コノ島ニハ、セイバントイッテ、ヒラケテ
 イ土人モ居ルガ、ワガ國ノ領地トナツテカ
 ラハダンダン、ヒラケテ來タ。

レンシュー 第四

コレハ、アイヌノエデアリマス。
 アイヌトハ、北海道ノ土人ノ
 コトデアリマス。
 アイヌハ、臺灣ノセイバントハ
 チガツテ、ヨホド、オトナシクア
 リマス。



ココニ、砂糖ヲ入レタ箱ガアル。
 コレハ、一介入りノ箱デアル。
 今、箱ノフタガアイテ居ル。
 アレ、黒イ小サイ虫ガ、數ノシレ
 ヌホド、アツマツテ居ル。
 アレハ、何トイフ虫デアラウカ。

砂糖ハタベモノノ味ヲトトノフルニ入用ナルモノナリ。
 ワガ國ニテハ、砂糖ハ、オモニ臺灣・四國・九州ニ産ス。

第十三 　　うをつり

浅せを流れる水のおとが、ざあざあときこえて居る。

よくすんだ水は、日光にかがやいて、すいしよーのよーに、うつくしう見えて居る。

枝　　岸のやなぎは、すすしい川風にふかれて、しづかに、枝をうごかして居る。

やなぎのかげには、二人の子供が一心に

つりをたれて居る。

あれは、太郎と次郎である。

魚　　次郎は一ひきの魚

をつりあげて、思はず、
「あ」とこゑを立てた。

魚は、はねまはって、
今にも、川におちさう



新編 吾妻の 巻二 三十九

四十一 會社 音 不 令 痛 虎
になつた。

次郎は「あれあれ、兄さん」と太郎をよんで二人で、やうやう、取つておさへた。

釣

あれ、こんどは、太郎が釣つた。

おや、また、次郎が釣つた。

あの小さい入れ物には、今に、一ぱいになるであらう。

第十四

川のうた

見わたすかぎりはてもなく、

野をばながるる大川よ。

いづこに生れいかにして、

かくは大きくなりたるぞ。」

われもと山のしづくにて、

たかねのおくにうまれしが、

草葉をくぐりこけをわけ、

たゆまずやまずすすみたり。」

細

はしるまにまに一すぢの

細きながれとなるにつれ、

ますます力はげまして、

たゆまらずやまらずすすみたり。

たゆまらずやまらずゆくうちに、

いづみとかはり川となり、

つひに空をもひたすべき

大なる川となれるなり。

空

第十五 クルメガスリ

著

夏ノ著物ニスルキレニ、クルメガスリト
イフモノアリ。

コノカスリハ、九州ノクルメトイフトコ
ロヨリ出ヅルモノニテ、ソノ始メハ、井上で
んトイフ女ガ、クフーシテ、オリ出シタルモ
ノナリ。

でんハ、クルメノ人ニテ、ヲサナキ時ヨリ、

歳



裁縫サイホヤ、ハタオリヲコ
ノミタリ。

でんハ、十二三歳ノ
時、クヅ絲ニテ、白キ絲
ノトコロドコロヲク
クリ、アキニテソメタ
ルノチ、ソノククリヲ
トキテ、キレニオリテ

見タリ。

珍

ソノキレニハ、白キトコロ出来テ、ウツク
シカリシユエ、人々ニ珍シガラレタリ。コレ、
クルメガスリノ始メナリ。

でんハ、ソノノチ、イロイロトクアーシテ、
サマザマノ珍シキカスリヲオリ出シタル
ユエ、クルメガスリハ、ツビニ、名高キ産物ト
ナリタリ。

第十六 才絲の手紙

ある日、才絲の母は、
才絲の著物にしよう
と思つて、くるめがす
りを買つて來ました。
母は才絲に、「これを
明日までにしたてて
もらふよ」に、手紙で



をば様におたのみなさい。」といひました。
才絲は、「はい。」と答へて、すぐに、次の手紙を
書いて、をばにおくりました。

まことに、ごやつかいでありますが、
このかすりで、私の著るひとつもの
を明日までに、おしたて下さい。

六月十日

絲

をば様

をばは、

したてものの事は、しよーちしまし
た。明日夕方までに、ぬうておくから、
取りにお出でなさい。

六月十日

をば

お絲さま

とへんじを書いて、これを、お絲の使にわた
しました。

レンシユー 第五

太郎ト次郎トハ、釣リタル魚ヲ
タヅサヘテ、家ニ歸リカケタリ。
ソノ時、次郎ハアマチテ、岸ヨリ
スベリオチ、川ニ流サレタリ。
太郎ハ、泳ギガ出來ルエエズ、
ニ、著物ヲヌギテ、川ニトビユミ、次郎ヲタスケタリ。



珍しくもありませんが、今日釣りましたあゆを、
ひとかごさし上げます。

六月十四日

國枝太郎

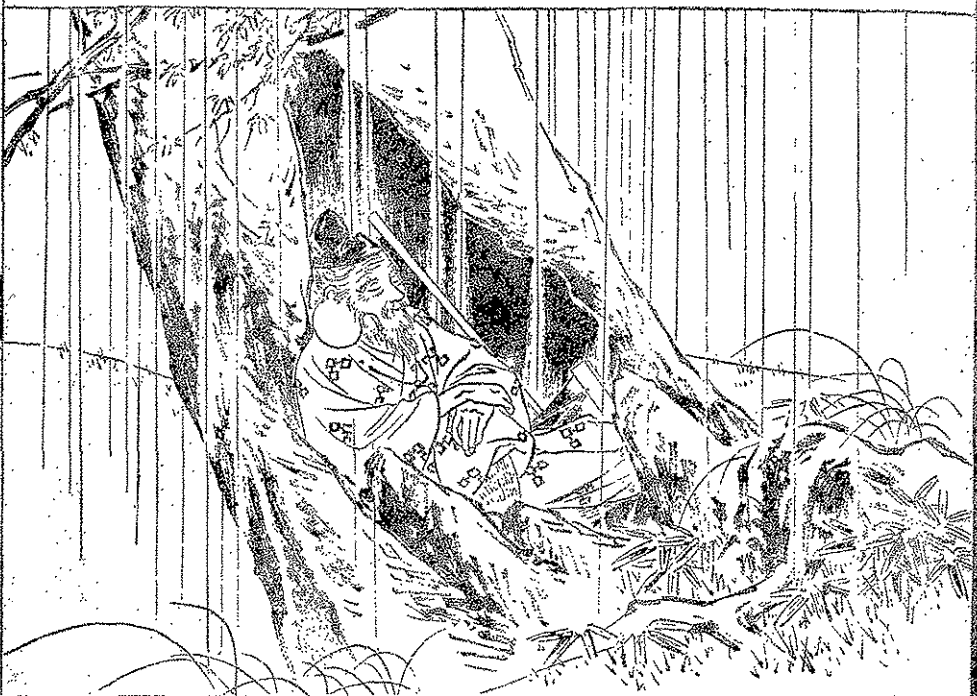
木村一郎様

第十七 二ぶとりのはなし(一)

むかし、みぎのほほに、おほきなこぶのあ
るきこりがありました。あるひ、おくやまで
はげしいあめかぜにあつて、かつることが
できませんでしたから、しかたがなく、ま
のうろのなかにねむりました。

よなかごろになると、おにどもがそのう
ろのまつにきて、さかもりをし、そのうちに

をどりだしました。
きこりははじめ
にはおそれておま
したが、おにどもの
をどりのおもしろ
さに、おぼえず、じぶ
んも、うろからとび
でてをどりしました。



おにどもはきこりのをどりのじよーず
なのにかんしんして、さかもりのなかまに
いれました。

さかもりがすんだあとでおにどもはき
こりに「をなたのをどりは、たいをーおもし
ろかつた。あすもきつときてくれ。そのやく
たくのしるしに、これをあづかつておく」と
いつて、こぶをぬきとつて、みなどこへかい
つてしまひました。

第十八　こぶとりのはなし(三)

きこりは、もしや、ゆめではあるまいかと、
ほほのあたりをなでてみました。が、ほん
とにほほのこぶがきれいとれてゐまし
たので、よろこびい喜んで、うちへかへりま
した。

このきこりのとなりに、もひだりのほほに

おほきなこぶのあるちぢがりましたが、
このはなしをきいて、「じぶんもこぶをとつ
てもらはう。」とつぎのひのゆふぐれに、なこ
ぶいって、きのうらにはひつてゐました。
ちぢはいまかいまかとまつてゐますと
そのうちにはなしのとほりおにどもがで
てきて、さかもりをはじめました。
ちぢは、「こぶとおもつて、うらのなかか

らとびでん、をどりま
した。

おにどもは「おお、ゆ
ふべのちぢがきた。」と
いって、たいそ、よろ
こびました。

しかし、をどりがへ
たでありましたゆゑ、



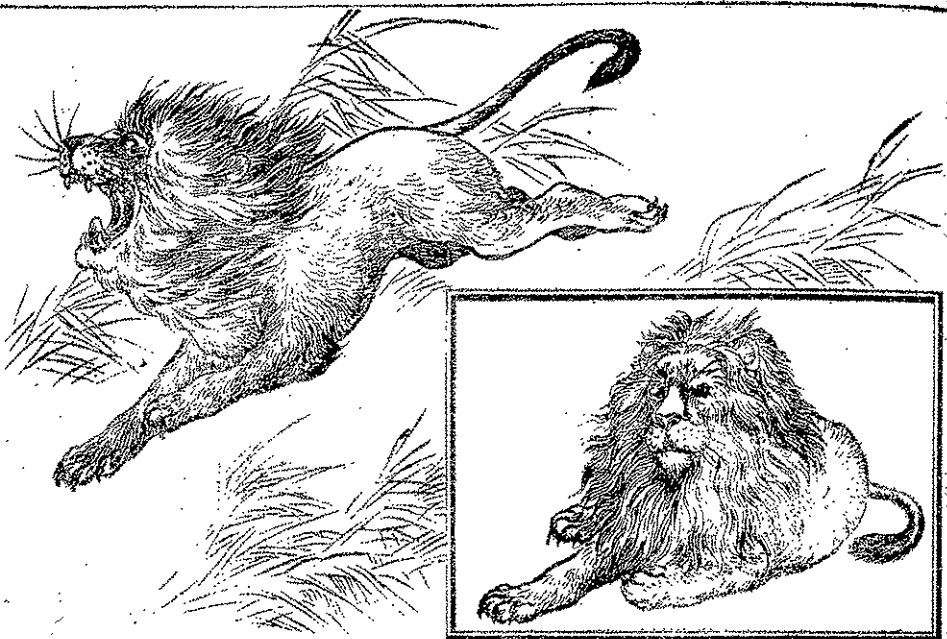
獸

みなこゑをそゐつて、「こんやのをどりはち
のともおもしろくない。ゆふぶあづかつて
おいたこぶはかつしてやれ。」といって、こぶ
をぢぢのみぎのほほにつけました。
そこでぢぢは、みぎのほほにも、ひだりの
ほほにも、こぶのあるぢぢと成つて、なくな
く、いっへかへりました。

第十九

獸ノ王

強 牙



ココニエガケルハ
シシナリ。シシハ獸ノ
中ニテ、モットモ強キ
モノユエ、獸ノ王トヨ
バルルナリ。
コノ獸ハ、多クあふ
りかトイフアツキ國
ニスム。ソノ爪ト牙ト

ハ大ソートガリ、目ツキ、ロツキナド、ハナハダ
オソロシ。ワケテモ、ヲスノシシガ、タテガミ
ヲフリ立テ、目ヲイカラシタルサマハ、夏モ、
寒ケガスルホドナリ。

シシガ、一コエ高くホユルトキハ、山ノ草
木モフルヒウゴクホドナレバ、コノコエヲ
他 聞キタル他ノ獸ハ、ミナ生キタルココチナ
ク、タダ、スクミ居ルトイフ。

第二十 空氣

早くはしると、何か、かほにさはるよーな
心もちがしませう。そのさはるものが、空氣
である。

空氣は、いつでも、我等のまはりにありま
すが、色もなく、にほひもないので、見てもわ
からず、かいでもわからん。

動 空氣が動くときは、強い力をあらはすも

のである。我等が風と
いつて居るものは、す
なはち、空氣の動くの
である。風には、よほど、
はげしいのがある。

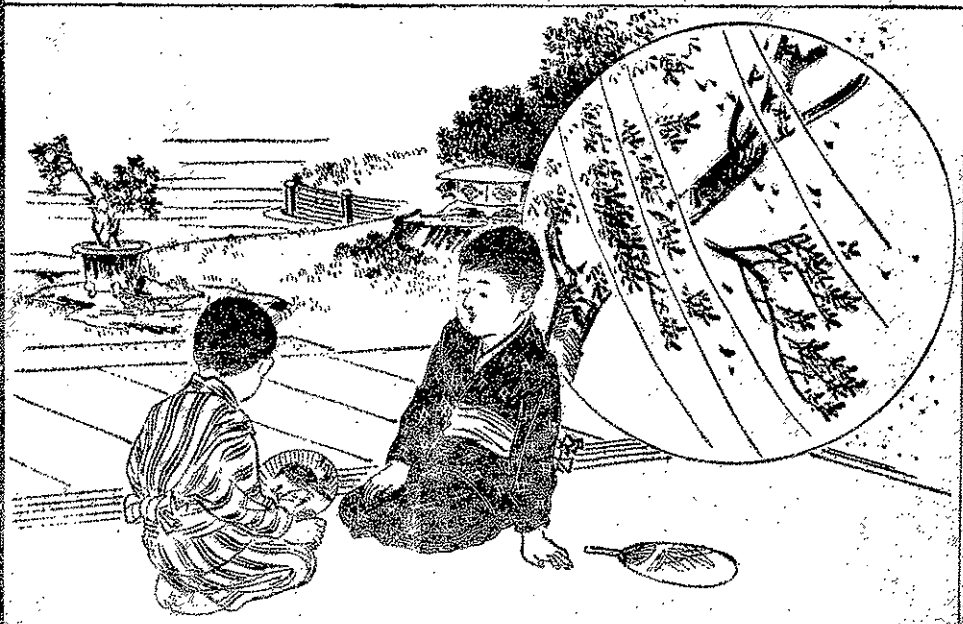
常
我等は常に、空氣を
すふから、生きて居ら
れる。空氣をすはずに

居れば、すぐ、しんでしまふ。

新
我等は、常に、きよくて新しい空氣をすふよ
うに、氣をつけねばならん。

はまづ、やもりの中の空氣は、きよくて新
しい。それゆゑ、かよ一なところをあるきま
はると、大そ一、からだのくすりになる。

第二十二 夕立



雲 墨



どんなものがいさまし
いといつても、夕立ほとい
さましいものはない。
ぬぐったよーな青空に、
少しの雲があらはれる。あ
れといふまに、墨を流した
よーにひろがつて、何とも
いづぬものすごい風がふ

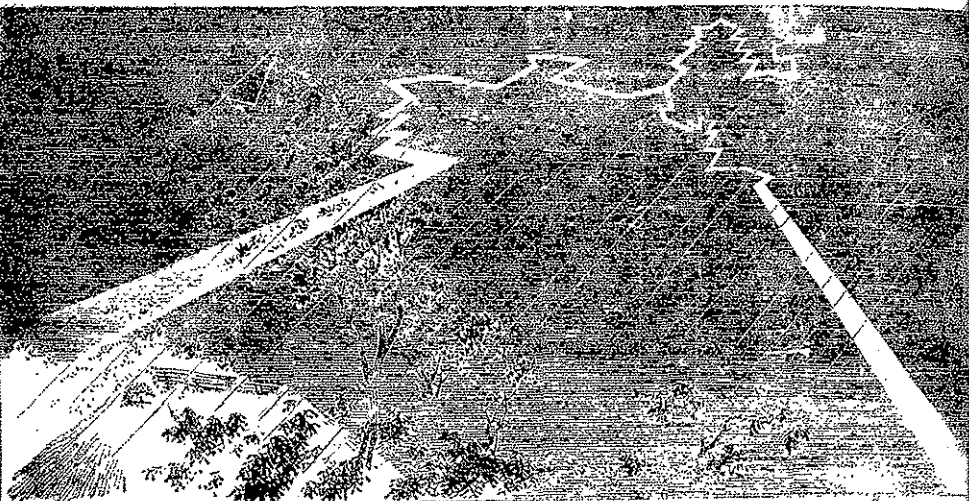
きまくつて来る。

電は、黒雲をやぶつて、ひ
らめき出す。

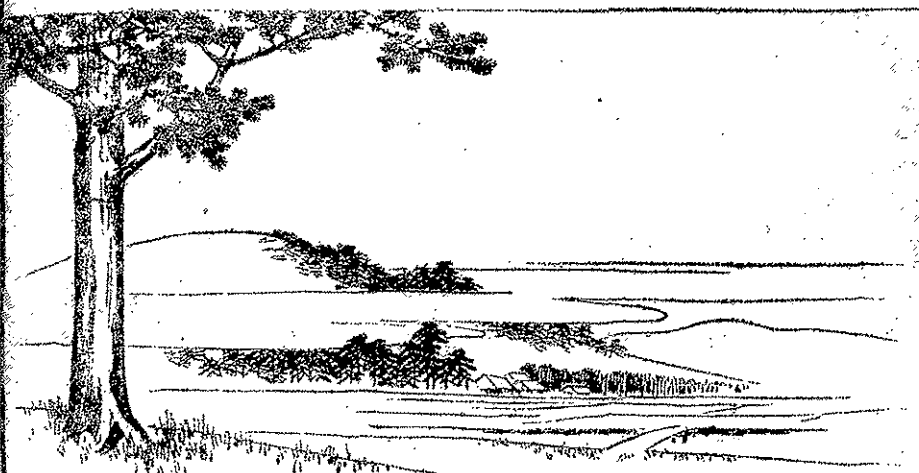
雷は、ごろごろとなり出
す。それと一しよに、小石の
よーな雨が、ざあざあと、ふ
つて来る。

風は、ますますはげしく

雷 電



勇



なる。雨はいよいよ強くなる。

その勇ましさ、そのすさまじさ、今にも、天がおち、地がわれるかと思はれる。

しばらくすると雨は、はれ、風はやみ、雷はしづまり、雲はきえて、天も地もあら

つたよーになる。

何がさつぱりするといつても、夕立のあとほどさつぱりすることはない。

レンシユー 第六

太郎イフ

「雷ハ獸デアリマス。コノ獸ハカが大ソ一強クアリマス。又スルドイ爪ト牙ヲモツテ居マス。

コノ獸ハ常ニ雲ノ上ニスンデ居マス。

夕立ノトキハ、口カラ電ヲハキ、又ホエナガラ走りマス。

アノゴロゴロト聞エルノハ、ソノホエルコエデアリ
マス。

父イス

「雷ハ、勇シイモノデアルユエ、昔ノ人ハ、獸ト思ツタノ
デアル。

「雷ノナルワケハ、學問スルト、オヒオヒ分ツテ來ル。」

今朝は大へんな強い風でありましたが、何もおまは
りはありませんでしたか。おたづね申し上げます。

第二十二 山ビコ

玉進
太郎ハアル日、山ヘアソビニ行き、何ゲナ
ク、矢玉ハアラレトフル中ヲ、進メヤマスラ
ヲオクルナヨ。トウタヒカケタリ。

同
ソノ時、山ノ向ウニモ、同ジヨーナコエニ
テ、ウタヲウタフモノアリタリ。

太郎ハ、フシギニ思ヒテ、「オオイトヨビタ
ルニ、向ウヨリモ、マタ、オオイトヨビカヘシ

タリ。

太郎ハイヨイヨ、フ
シギニ思ヒ、コエヲハ
リアゲテ、ダトヒ、命ハ
スツトテモ、御國ノタ
ミノヲヲシサヲ、見セ
ヨシメセヨ、ソノヲヲ
シサヲ。トウタヒタル



ニ、向ウニテモ、サキホドヨリ、ウタヒ居タル
モノト見エテ、ソノヲヲシサヲトイフコエ、
キコエタリ。

太郎ハオソロシクナリタレバ、イソギテ
話 家ニカヘリ、コノコトヲ母ニ話シタリ。

母ハソレハ、山ビコトテ、オマヘノコエガ、
向ウノ山ヘヒビキ、ソノヒビキガ、マタ、オマ
耳ヘノ耳ニキコエタルナリ。ト教ヘタレバ、太

郎ハ始メテ山ビコトイフモノヲシリタリ。

れんしゅー 第七

常一は竹のつつを口にあて、小さいこゑでもしもしとよんで、何か話しかけて居ます。

時太郎は、つつを耳にあて、これこゝらひながら、聞いて居ます。

これは、でんわのまねをして居るのであります。



第二十三 ヤマトタケルノミコト

ヤマトタケルノミコトは、ケイコーテ

ンノーさまのおこさまで、まことに、つよいおかたであります。

おとしが十六のときに、クマソといふわるものどもを、ごせいばつにゆかれました。

そのとき、わるもののたいしよーのクマソタケルは、さかもりをしてゐました。

ミコトは、をんなのすがたをして、そのそばにでられました。



ミコトは、夕ケルが
よひたふれたのをみ
て、かくしもつておら
れたけんで、夕ケルの
むねをさされました。
そのとき、夕ケルは、
くるしいいきをつい
て、「このつよい夕ケル

をころすものは、たれた。なのれなのれ」とい
ひました。

ミコトは、「われは、テンノーのみこ、ヤマト
ヲグナである。」とまうされました。

そこで、夕ケルは、「にっぽんぢゆうーに、あな
たほどのつよいおかたは、ありますまい。それ
ゆゑ、おそれながら、ヤマト夕ケルといふな
をたてまつりませう。」といつて、いきがきられ

ました。

これよりよのなかのひとが、ヤマトヲグナといふおなをあらためて、ヤマトタケルとおよびまうすよーになりました。

第二十四 げんぶ門のつとり

軍門

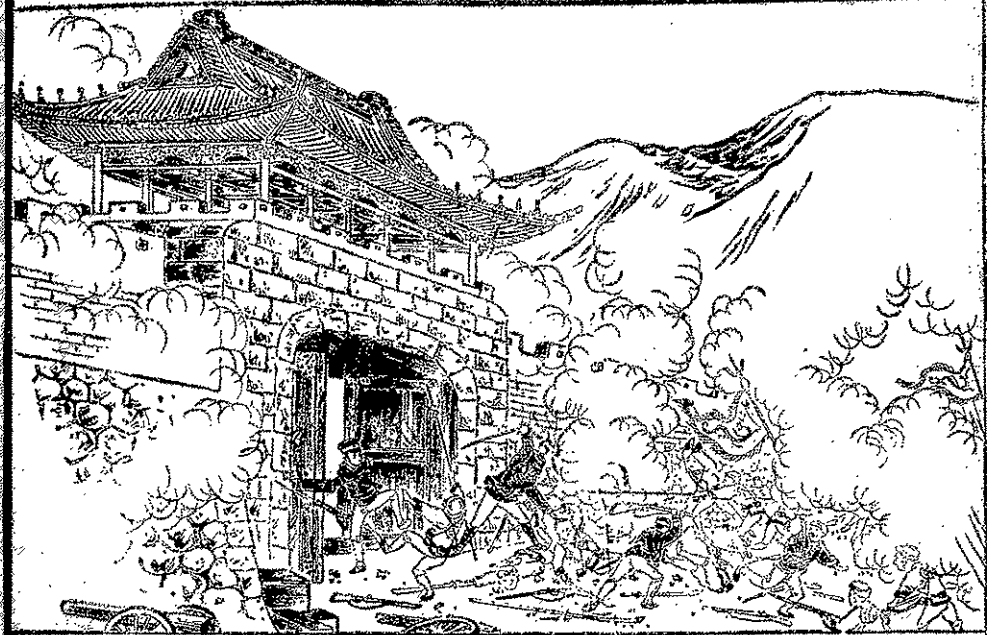
日清せんそーの時、あが軍が平壤のしろをとりにかこんで、とーとー、玄武門までせめよせました。

玄武門は、じょーぶなうへに、かべが高いので、せめ入ることが出来ませんでしたから、一同、こまりはてて居ました。

開

この時、三村中尉は、雨あられとふり来る丸のなかをもおそれないで、身ををどらし、高いかべをのりこえました。これを見た十五人の勇ましいへいしは、われもわれもと、門をのりこえて、内から、さつと、門を開き

兵 敵 城



ました。

そこで門の外のおわが兵たいは、一どにどつと、しろの内にせめ入りました。

敵の兵は、この勢におそれて、城をすてて、にげました。

わが兵は、すぐに、日の丸の旗を城の上
にひるがつして、天皇陛下のばんざいを
なつたてまつりました。

第二十五 日本男子

いくさの時には命をすてて、

國家につくすが日本男子。

きらめくつるぎもとびくるたまも、
おそれず進むが日本男子。

仕 貧

ふだんの時には力のかぎり、
 仕事をはげむが日本男子。
 貧のたうげもなんぎの海も、
 おそれずこゆるが日本男子。
 古來すぐれし日本男子。
 名をばけがすな日本男子。

をはり

明治三十四年六月廿五日印 刷
 同 年六月廿八日發 行
 明治三十四年八月四日訂正再版印刷
 同 年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本 尋常科

甲種	卷一	八錢	卷五	十二錢
乙種	卷二	九錢	卷六	十二錢
卷三	十錢	卷七	十三錢	
卷四	十一錢	卷八	十四錢	
合計	金九十九錢			

明治三十四年八月六日
 文部省檢定濟



發賣所

帝國書籍株式會社

東京市神田區南乘物町十番地

著 者 小 山 左 文 二

著 者 武 島 又 次 郎

印 刷 者 兼 發 行者 株 式 會 社 普 及 舍

東京市日本橋區吳服町壹番地

代 表 者 右 社 長

山 田 禎 三 郎

